幼少期に親元を離れた子どもたちの社会参加へのプロセス

―インドの元ストリートチルドレン，児童労働経験者を追って―

伊達文香[1]・森永康子・尾形明子

Interview study on the process of social participation by former street children and child laborers in India

Fumika Date, Yasuko Morinaga, and Akiko Ogata

This study examined how young adults in India, who were former street children and/or child laborers, were struggling to become independent and find jobs with the support of NGOs. We conducted interviews with young adults and NGO staff, and also observed activities conducted by NGOs in India. Some young adults successfully obtained technical skills and applied for jobs with the support of NGOs. However, difficulties in admitting their own mental problems, and not being completely understood by NGO staff, made it difficult for these young people to adapt to the mainstream Indian society. Our results suggest that former street children and child laborers need continuous psychological support, in order to facilitate their participation in society as independent adults.

Keywords:　India, Social participation, Street children, Child labor, Psychological process

問題

ストリートチルドレン・児童労働者とは何か　まず「ストリートチルドレン」という言葉は 1979 年に国連の「子ども年」で使用され，その存在が認識されるようになった。ストリートチルドレンの多くは，自ら家庭での虐待やネグレクトよりも路上での生活を選択しており（Sondhi-Garg, 2004），生活のために働いている。労働内容としては，物売りや廃品回収，靴磨きや物乞いなどが挙げられるが，継続的な就労は望めず，日雇い労働に従事することがほとんどである （中嶋・中島，2010）。こうした現状に対して，ミレニアム開発目標（MDGs）は「極度の貧困と飢餓の撲滅」を含む 8 つの目標を掲げ，193 の国連加盟国と 23 の国際機関が，2015 年までにこれらの目標を達成することに合意しており，ストリートチルドレンを含む貧困層への支援に一層の注目が集まっていると考えられる。

しかしストリートチルドレンの定義は明確には確定されておらず，そうした子どもたちに関する

[1] 本研究は広島大学校友会学生による学術研究への研究資金助成を受けて行われた。

研究が行われる際には「ストリートが，自分の家以上に本当の家のようになっている子どもで，必ずしもホームレスであったり，家族と別に住んでいたりはしないが，責任ある大人による保護，監督の無い状況で生活する子ども」というユニセフの定義を基に，研究の目的や調査地の子どもの特徴が加味され使用されていることが多い（針塚，2011）。そして多くの場合，大人の保護や監督下にないが，自立して生活する子どもたちに研究の焦点が当てられている（Panter-Brick，2002）。

次に発展途上国ではストリートチルドレンが児童労働者となるケースと同時に，家族の保護のもとに暮らす子どもが児童労働のターゲットとなる事例も近年多く取り上げられている。国際的には児童労働を何歳以下の労働とするのかは明確にされていないが，国際労働機関（以下 ILO とする）の「就業の最低年齢に関する条約（第 138 号）」では，最低就労年齢を 15 歳以上とし，国連の「子どもの権利に関する条約」では，18 歳未満を「子ども」と定義しているため，「児童労働」にあたる年齢が狭義では 15 歳未満, 広義で 18 歳未満と考えられる。しかしこのような規定がありながらも，後述する社会背景に加えて，家庭の経済環境と養育者の教育への無関心といった要因が，規定年齢以下の児童労働を引き起こしていると考えられる（米村，1992）。このように，貧困層の家庭の抱える経済問題を始めとした社会背景に基づく諸問題と教育への関心の有無によって生まれるストリートチルドレンや児童労働者の数が世界最多とされるのが，インドである。

インドの路上で生活するか働く 5-14 歳の子どもは少なくとも 1800 万人いるといわれる（Sondhi-Garg，2004）。彼らの多くは幼少期に親元を離れ，ゴミ拾いや物売りで生計を立てており，中には児童売春や麻薬の取引といった犯罪に手を染めることも少なくない。こうした現状に対して，インドでは 1992 年に子どもの権利条約を批准し，同年に子どもの権利協定を制定した。この協定によって条約が定める 18 歳未満を子どもとする定義にインド国内の法律も一致させる必要があるという認識のもとで，国内法の整備が行われてきている。しかし，インドの法律における「子ども」の規定を示す Table1 でも示唆されるように，インドでは子どもの年齢を 14 歳未満とする傾向が強い。また，ILO によると，インドは先述した就業の最低年齢に関する条約や最悪の形態の児童労働条約を批准していない。

Table 1.　インドの法律における「子ども」の年齢

1948 年 工場法	14 歳未満の子どもは，いかなる工場労働も許可されない。15-18 歳の年齢の少年は，設定された医師による健康証明書を保持しており，工場において雇用されることが可能となる。14-18 歳の年齢の子どもは，4 時間半を超えて雇用されることは出来ない。
2000 年 少年法	「少年」あるいは「子ども」とは，18 歳に至らない年齢の者を意味する。
2001 年 改正 インド憲法	21 条（a）国は 6-14 歳の全ての子どもに，法律で定めるところにより，普通・義務教育を行わなければならない。 51 条（k）親または保護者であるときには，その子どもが 6-14 歳までの間，教育を受ける機会を与え，必要に応じて後見すること。

針塚（2011）をもとに作成

なぜこのように多くの子どもたちがストリートチルドレンになり，また，なぜ法律で年齢が規定されているにも関わらず児童労働者になるのか。その原因を個人のレベルで考えれば，路上に住むか否か，働くか否かは子どもの性格や幼少期の虐待や育児放棄といった，それぞれに異なった家庭の問題や教育の機会の有無によると考えられる。しかし，社会的なレベルの変化である貧困とグローバル経済の不均衡がストリートチルドレンや児童労働者という現象を生み出しているという考えもあり，インドの貧困や家族構造の変化といったマクロな側面にも留意する必要があるだろう（Sondhi-Garg，2004）。針塚（2011）は，マクロな側面からの背景として，都市化現象と家族構造の変化を指摘する。1992 年にボンベイで行われたユニセフの調査は，地方から都市への大規模な移動が都市の人口過密と，労働環境の悪化，ホームレス化，基本的な社会福祉，サービスの剥奪と生活条件の劣化を生んだことを示している。インドの急速な都市化において，雇用を求めて都市に出てきて仕事を失った，あるいは収入が少なく土地を持たない農業労働者が，スラムに居住する人々，歩道で寝起きする人々，非熟練・不定期労働者，未組織セクターの労働者となり，加えてストリートチルドレンや児童労働者が都市の貧困層の大多数を構成するようになったと考えられる。また，インドの家族構成の大きな特徴は，拡大家族の中でも，合同家族の形態をとっていることにある（応地，1992）。応地（1992）によると，合同家族とは父系性の場合に男子は結婚しても妻や子どもと共に家族内に留まり，次世代へと累積していく形態であるが，これは守るべき財産をもつ上層家族で多く見られ，実際に中下層では核家族が増加しているという。拡大家族から核家族へという家族構造の変化の中で，大人が孤立することによって感じるストレスの増大は，家族の機能不全という深刻な問題をもたらす（針塚，2011）。このように世界経済の変化が，都市化現象や家族の機能不全をもたらし，ストリートチルドレンや児童労働者という現象につながっていると考えられる。

ストリートチルドレンや児童労働者と NGO の関係性 こうした子どもたちを支援する団体として，インド政府と同様，一部ではそれ以上の効果を発揮している機関として，非政府組織（以下 NGO とする）が挙げられる。インドは NGO 大国と呼ばれ，社会・経済的低階層者に向けた活動を行う NGO は 10 万以上存在するといわれている（Nawani，2002）。こうした NGO は政府の資金提供も受けながら，ケアの必要な子どもに対して，保護施設の運営や公私立学校の教育で補いきれない部分を担当する目的で行われる Non Formal Education（以下 NFE とする）の実施など，食事や生活場所，教育等に関して一般的な水準の生活を送ることができるよう支援している。NGO が掲げる活動目標には，ストリートで暮らす子どもたちをメインストリームに参加させるというものが多い（Company Registration India，2013）。社会的・教育的に不利な状況にある子どもたちに対しては，政府以上に NGO が提供するプログラムが，より実践的であるといわれる（Sondhi-Garg，2004）。

NGO 以外にも，ストリートチルドレンや児童労働者と関係をもつ大人としては，両親，警察官，雇用主，顧客などが考えられる。しかし，そういった大人はときに自分よりも立場の弱い子どもたちを排斥したり，虐待したりするという現状がある。NGO はそうした子どもに対する福祉的・教育的支援をインド全土で行っていることから，ほとんどのストリートチルドレンや児童労働者と何らかの関係を持っていることが多く（中嶋・中島，2010），その活動の必要性と他の大人の存在とは異なる支援の重要性がうかがえる。また Punalekar（2004）によると，インドの NGO は，ボランティ

ア活動という形で国民の生活において不可欠な部分として，長い間歴史的に受け継がれてきたものである。ボランティア活動は，インド国民の 8 割を占めるヒンドゥー教の中で喜捨や罪の償いといったイメージでなされてきた。このようにインド社会に根付くボランティア活動としての NGO という存在は，支援の受け手だけでなく，担い手にとっても不可欠な存在といえるだろう。ストリートチルドレンや児童労働者が NGO スタッフとの関わりや NFE といったプログラムによって，一般的なインド社会に戻る契機となった可能性は高いと考えられる。

しかし全ての子どもを一般的なインド社会，つまりメインストリームに戻す，もしくは適応させることに NGO のスタッフ自身が困難を感じていることが観察研究などを通して明らかになってきている（針塚，2007）。これは就学や就職といった形で社会に戻った子どもたちであっても，それまでの路上や劣悪な労働環境で培われた価値観がほとんど認められない環境での生活に馴染めないことや，路上の生活，言い換えれば社会的ルールに縛られない生活を求めて，逃げ出してしまうことが大きな原因と考えられる。また，資金面で困窮する NGO は多く（深尾，2011），資金不足のため十分な数のスタッフを確保できなかったり，専門的なスキルの習得の機会がなかったりという課題も多いと考えられる。更にストリートチルドレンや児童労働者を支援する場合，子どもの権利条約で提言されている「自由に物事を決定する権利」が重視されるため，その保護に強制力をもたせることが難しい（中嶋・中島，2010）。したがって子どもたちを常に一か所に留めることが出来ず，継続的な支援を行うことが困難であることが挙げられる。

ストリートチルドレンや児童労働者を扱ったこれまでの研究では，彼らの生活環境や養育者のいない状況で暮らす子どもの社会関係に注目し，子どもたちに長期的に信頼できる関係が欠けていることの問題を指摘しているものが多い（針塚, 2011）。例えば, インドの心理学者の Sondhi-Garg（2004）は，ストリートチルドレンに対するインタビュー調査から，子どもの生活環境とその問題点を，出身家庭の問題を含めて子どもが家出をしてきた背景と，ストリートでの人間関係から明らかにしている。Sondhi-Garg（2004）によると，ストリートチルドレンのほとんどは友人が少なく，周囲の大人と親密な愛着形成の機会を持たないため，他者との関係は不信に満ちたものであるという。路上での生活は，子どもたちに仕事の機会と自由を提供しているが，子どもの尊厳を侵害し，身体的，感情的，健康的に悪影響を及ぼしている。しかし，多くの子どもは家庭での虐待やネグレクトよりも，路上での過酷な生活環境を選んでいるのである。また，カナダの人類学者 McFadyen（2004）は，NGO の参与観察と子どもたちへのインタビュー調査を通して，子どもは流動的な生活の中で起こる出来事に対して，自ら選択・決定を行っていると論じるとともに，ストリートチルドレンや児童労働者の経験は決して一般化できないと認識することが重要であると指摘している。このようにインドのストリートチルドレンや児童労働者に関する研究の多くは彼らの現状の把握に留まっており，彼らの社会参加までの一貫したプロセスは明らかになっていない。

こうした研究を背景に，針塚（2011）は約 6 年間に渡る縦断研究を経て，ストリートチルドレンと NGO スタッフとの長期的な関係に焦点をあてながら，彼らの職業選択や教育の機会へのアクセスなどといった自己決定がいかに行われているかを考察し，成長と共に周囲との関係や社会的地位を重視した，自律的な自己決定が行われるようになるとしている。そしてそうした自律としての自

己決定が行われるようになるためには，NGO の存在が重要であるという。しかし NGO のどういった支援が，子どもの自己決定やその先にある社会参加に重要であるかは明らかではない。

本研究の目的　本研究はストリートチルドレンや児童労働者に対する継続的な支援を行うための手掛かりを得ることを目的とし，彼らの社会参加に向けたプロセスを心理学的な視点から考察を行うことを目的とする。子どもたち自身の過去，現在，未来に対する考え方を検討するため，自己の経験を十分に回想でき，現在の感情についても理解できていると思われる青年期の元ストリートチルドレン，児童労働経験者を対象とする。さらに青年期は社会における自己を形成していく時期であり（永井，2008），社会参加へのプロセスを考察する上で重要な手がかりを与えてくれると考えられる。具体的には，幼少期に親元を離れた元ストリートチルドレンや児童労働経験者の青年が NGO の支援を受ける中で，社会参加に向けてどのような心理的プロセスを辿るかを検討する。この調査内容とした意図は，過去・現在・未来の時系列に沿って尋ねることで，ストリートチルドレンや児童労働者であった過去をどのように捉え，青年期の現在何を考え，そして社会参加といった将来にどのような構想を抱くのか，といった心理的なプロセスをたどることであった。また同時にスタッフにも調査することでそれぞれの立場からの考察を加える。これによって，インドのストリートチルドレンや児童労働といった経験のある青年が，NGO の支援を受けて，どのような心理的変化をたどり社会参加していくのかといった質的な実態把握が行えると考えられる。さらに継続的な支援を行うための心理学的介入方法に有効な視座を得ることも可能であろう。

主要概念の定義　本研究における「元ストリートチルドレン」とは，前述したユニセフの定義と青年期に着目することを加味したうえで，「責任ある大人による保護，監督を受けずに，路上もしくはそれに類似する環境を主な生活の場所として，一定期間生活した経験のある青年」とする。次に「児童労働経験者」とは，諸条約を参考に，「14 歳未満の頃に営利目的の仕事に就き，収入を得ていた経験のある青年」とする。また，本研究において扱う対象の青年たちに共通する点として，「幼少期（平均 5 歳前後）に親元を離れた」ということが挙げられる。したがって，本論文で「青年」と呼ばれる対象者は子どもたちにはこれらのことから，元ストリートチルドレンもしくは，児童労働経験者といった表記には，「幼少期に親元を離れた青年」といった内容を含むことが共通して定義されることとし，これ以降，子どもたちのことを「青年」と表記する。

方法

調査地の概要　本研究の調査は Figure1，2 にも示すように，インドの西ベンガル州に属するコルカタ（旧名：カルカッタ，地図内には○で示す）とシリグリ（地図内には□で示す）にある 2 つの異なる NGO において行われた。まずコルカタは現在 1,411 万人とインド三番目の都市圏人口を抱え，屈指の経済都市として知られている。Hindustan Times（2011）によると，コルカタ市民の性比は男性 1000 人に対し女性は 899 人であり，女性の比率が低いが，これは農村部からの出稼ぎ男性の流入によってもたらされている。また，コルカタの識字率は 87.14%であり，インド全国平均の 74%を上回っている（Government of India，2011）。しかし，1 割程度の人は依然として読み書きができず（針塚，2011），コルカタにおける貧富の差が大きいと考えられる。こうした貧富の格差

の大きいコルカタに 1857 年に設立されたのが，Loreto Day School Sealdah（以下 Loreto とする）である。Loreto はイギリスにその母体をもつキリスト系 NGO で，支援の担い手も受け手も主に女性中心であることに特徴がある。Loreto は私立の女子校として運営されておりその校舎の最上階が Rainbow Home（以下 Home とする）と呼ばれる女子専用の保護施設となっている。調査当時 4-21 歳の女児 145 人が保護されており，ここでインタビュー調査を行った。

次にシリグリはネパール，ブータン，バングラデシュなどの近隣の国への空港，道路，鉄道の乗り換え地点となっているほか，ダージリン観光のための中継地点でもあり，西ベンガル州の交通の要所といえる。人が流動的に移動するシリグリに 2003 年に設立されたのが，Care of Needy Children Rightfully Nurtured（以下 CONC'RN とする）である。CONC'RN はストリートと鉄道のプラットホームで暮らす子どもたちの現状改善を目指すグループによって設立された NGO であり，シリグリの中でも最も大きな駅である New Jalpaiguri 駅（以下 NJP 駅とする）の駅構内やその周辺といった駅に密着した支援活動を行っているのが特徴といえる。その特徴通り，NJP 駅の構内で子どもの一時保護などを行う Child Protection Booth（以下 Booth とする）や，駅のすぐ近くで駅に住む子どもたちに安全なシェルターや食事を提供する男子専用の Drop in Center （以下 DIC とする）を子どもの出入りを自由にして運営するほか，Booth や DIC で発見された子どもが一時的に保護される施設として，Transit Home（以下，男子（Boys）用を BTH，女子（Girls）用を GTH とする）の運営も行っている。本研究では，DIC と GTH，BTH にてインタビュー調査を行った。

Figure1.　インド全図
（出典：白地図専門店）

Figure2.　西ベンガル州の地図
（出典：旅行のとも ZenTech）

調査対象者　Loreto の Home で暮らす 14-21 歳の女子 11 名，CONC'RN の DIC で暮らす 14-21 歳の男子 7 名，GTH で暮らす女子 3 名，BTH で暮らす男子 2 名，CONC'RN の保護施設を出て何らかの職に就き自立した生活を送る 20-27 歳の男子 4 名，さらに NGO で働くスタッフ計 14 名

（Loreto5 名，CONC’RN9 名）であった（Table 2, 3 参照）。今回 2 つの NGO の保護施設で調査を行った主な意図としては，調査対象者をなるべく男女同数にすることであった。青年期の子どもたちを保護する NGO にとって性は重要な問題であり，男女それぞれに別のシェルターを構える NGO は少なくない。更に McFadyen（2004）によると，インドの路上で生活する少女との接触は極めて困難とされるため，多くの少女を幼少期から継続的に保護する NGO として Loreto を選んだ。一方で，男子のストリートチルドレンや児童労働者は路上でもよく見かけられるため，その実態により迫るために，流動的な子どもたちの保護に奮闘する NGO として CONC’RN を選んだ。さらに，青年期の社会参加のプロセスという変化を検討するために，できるだけ現在職に就いている者へのインタビューの実施も心掛けた。

手続き　本研究は，NGO の活動の参与観察とインタビュー調査によって行った。まず，2013 年 9 月 27 日から 10 月 2 日の 6 日間，Loreto の Home を訪問し，前半の 2 日間で活動の参与観察とスタッフへのインタビューを行い，後半 4 日間で青年にインタビューを行った。なお，全ての調査は英語で行った。次に，同年 10 月 5 日から 21 日までの 17 日間，CONC’RN の DIC と BTH，GTH を訪問した。前半 9 日間で活動の参与観察とスタッフへのインタビューを行い，後半 8 日間で青年にインタビューを行った。調査はスタッフに対しては英語で行い，青年に対してはシリグリ出身の日本留学経験のある通訳を介してベンガル語（西ベンガル州の公用語）で行った。

調査内容　調査内容はスタッフと青年で異なり，スタッフに対しては現在の職に関する就職理由や経験，価値観，NGO で保護する子どもに対する考え方などを尋ねた。青年に対しては，過去・現在・未来の時系列に沿って，ストリートチルドレンや児童労働者になったきっかけ，この NGO に来た経緯，現在の生活に対する考え方や将来構想を尋ねた。インタビュー調査はスタッフ，青年共に 1 人 30 分程度で行った。また，インタビュー内容は同意を得た上で録音した。

倫理的配慮　事前に 2 つの NGO の責任者に調査内容の確認と調査協力の同意を得た。更に各インタビュー前に各対象者に対して，調査結果に関してプライバシーを守り，個人が特定されないこと，回答を拒否しても何の不利益も被らないことを説明し，調査協力の同意を得た。

分析方法　まず質問項目ごとに回答内容をカテゴリー分けした。次にインタビューデータの分析は，KJ 法（川喜多，1970）が示す，「紙切れづくり」「グループ編成」「A 型図解」の過程を参考に行った。具体的にはまず調査対象者の回答を意味のある文節で区切り，それぞれに簡単な見出しをつけた。次に内容が近いもの同士を集めてグループ編成を繰り返し，「ラベル」を作成した。そして，ラベルの内容が近いもの同士を更に集めて「カテゴリー」を作成しながら，カテゴリー同士やラベル同士の関係を考慮して，空間配置を行った。この際妥当性を高める工夫として，ラベル編成時に臨床心理学系を専攻する大学院生 1 名と協議の上，空間配置を行い，完成後心理学を専門とする大学教授 1 名と空間配置について協議を行った。そこで合意が得られたため，ある程度の妥当性が確保されていると考える。

Table 2.　青年の基礎情報

子ども (ID)	年齢	性別	滞在年数 (滞在場所)	現在の通学・職の有無	家族構成	親元を離れた 理由	施設に来た 経緯
C1	14	女	1年4ヶ月 (GTH)	—	母と兄と姉，他人の家で働かされていた。	母によって警察に預けられた。	警察からの紹介
C2	16	女	1年4ヶ月 (GTH)	—	C1の姉	母が自分を育てられなかったため。	警察からの紹介
C3	16	男	2ヶ月 (DIC)	—	母は死亡，父と継母と弟。	父の継母への暴力を見るのが耐えられなくなった。	駅で友達に誘われる
C4	17	男	10年 (DIC)	—	母は蒸発，父は死亡。継母のみ。	継母からの育児放棄。	駅の警察からの紹介
C5	21	女	2年 (DIC)	—	家族は不明。小さい頃から他人の家で働く。	勤務先の家の強制労働に耐えかねた。	駅で警察に保護後，紹介される
C6	16	男	1年 (DIC)	—	家族は不明。	小さい頃に駅で母とはぐれる。	駅の警察からの紹介
C7	17	男	6年(DIC)	—	母は蒸発，父と弟。	働くために家を出た。	施設を逃げ，警察に紹介される
C8	14	男	3年 (DIC)	—	父と姉2人。	父からの暴力。	駅で友達に誘われる
C9	15	男	1週間 (BTH)	Class8[a]	弟の出産時に母は死亡，父と継母。	継母から自分の稼いだお金を搾取されていた。	父に働かされそうになって，逃げてNGOに保護される
C10	16	男	6年 (DIC)	—	母は死亡，父と継母と妹。	父のアルコール中毒(妹と一緒に逃げる)。	駅のリキシャの運転手の紹介
C11	15	男	3年 (DIC)	—	父は死亡，母と継父と弟。	母からの育児放棄。	スタッフの紹介
C12	14	男	1ヶ月 (BTH)	Class6	母の自殺。父と兄と妹。	母が駅でピクニック中に自殺したため，家族はそのままばらばらに。	スタッフの紹介
C13	20	男	1年6ヶ月 (DIC)	自営業	父と母，兄弟5人。	親のお金を盗んで働いて返すために家出。	駅で友達に誘われる
C14	21	男	4ヶ月 (DIC)	コック	父と継母。	継母からの虐待。	スタッフの紹介
C15	22	男	10年 (DIC)	NGOスタッフ兼駅の清掃員	父は死亡，母のみ。	母と一緒に駅まで来るが，はぐれる。	駅で友達に誘われる
C16	27	男	5年 (DIC)	水ボトル売り兼工場勤務	父は死亡。母と妹。	親戚から孤立している家族が嫌になって，家出する。	スタッフと協力して，DIC建設

a インドの教育制度は，5・3・4制となっており，例えばClass8＝中学3年生である。
(Ministry of Human Resourse Development, Department of Education参照)

Table 3.　スタッフの基礎情報 [a]

スタッフ (ID表示)	年齢	性別	職種	勤務年数 (勤務場所)[b]	最終学歴	専門分野
S1	45	女	ホームマザー	7年(GTH)	Class12	―
S2	25	男	ホームファザー	2年(BTH)	修士課程 在学中	サンスクリット語
S3	30	女	DIC現場責任者	1年(DIC)	修士課程修了	社会福祉
S4	35	男	プログラム責任者	4ヶ月 (オフィス)	修士課程修了	法律
S5	28	女	カウンセラー	3年(DIC, BTH，GTH)	修士課程修了	社会福祉
S6	29	男	DIC運営者，事務	4ヶ月 (オフィス)	修士課程修了	社会科学
S7	33	男	Booth現場責任者	10年(Booth)	Class12	―
S8	30	男	BTH,GTH運営者	1年 (オフィス)	大卒	社会福祉
S9	52	男	NGO責任者	1年 (オフィス)	修士課程修了	社会福祉

a. 全員，国籍はインドである。
b. 勤務場所は，仕事中おもにどの場所で過ごしているかを示す。

結果

質問項目ごとのカテゴリー分けの際，Home の女子 11 名中 10 名に関しては，その回答から路上生活経験もしくは児童労働経験が見られなかった。ただ方法でも述べたように路上生活経験のある少女との接触が極めて困難であることと「幼少期に親元を離れた」という点において，CONC’RN の子どもと比較することができる可能性を考え，本研究ではその回答の一部を結果として扱うこととする。そこで以下では主に，CONC’RN でのインタビュー結果をもとに考察を進めるが，その際インタビュー内容以外の参与観察時に得られた情報なども含めて考察を行う。

調査対象者の基礎情報　まず Table2 では青年の年齢，性別，施設での滞在年数，現在学校に行っている，もしくは職に就いているかと，親元を離れた理由となる家族構成と原因を簡潔に示した。また，Table3 ではスタッフの年齢，性別，職種，勤務年数のほかに，最終学歴や専門分野も示す。

Table2 より，青年の親元を離れる理由としては，「両親の離婚・死別と再婚」，そして「新しい親からの育児放棄」や「虐待」が最も多いことがわかる。こうした理由から，新しい家庭環境で青年と親が共に関係再構築の困難を解決できないまま，青年が幼いころに家庭を離れてしまっていることが考えられる。また，青年が施設にアクセスするための仲介役として最も多いのが「警察」や「スタッフ」，「友人」であるが，「駅のリキシャの運転手」など，その他の大人といった回答もあることがわかる。彼らは「ステイクスホルダー」と呼ばれる役割を担っており，スタッフと連携して駅に 1 人でいる子どもを見つけた際には施設に連絡するように契約している。しかしステイクスホルダーについて回答した青年は 1 名のみだったため，その役割がどれほど効果を持っているかは明確には言えない。

次に Table3 より，スタッフは全員，勤務年数が比較的短いことから NGO という職種に新たに転職したり，同職種間の転職が多いことが考えられる。また，最終学歴では「修士課程修了」が，専

攻は「社会福祉分野」がそれぞれ最多であった。インドの高等教育への進学率は，2006 年におよそ 12%である（The World Bank，2006）ことをふまえると，NGO スタッフがインド社会の中で，上位層の出身であることが推測される。

青年の社会参加へのプロセス　青年がどのようなプロセスを経て社会に参加して行くようになるのかという点について，青年と NGO スタッフそれぞれの語りをもとに，KJ 法を用いて分析した。まず，青年の場合には「社会参加」，NGO スタッフの場合には「青年にとっての社会参加」という概念をあらかじめ設置した上で，この概念と他のカテゴリーやラベルとの関係を空間配置した結果を Figure3,4 に示す。この際，回答から特に関係が想定された場合には KJ 法の「関連付ける記号のいろいろ」（川喜多，1970）を参考に促進もしくは阻害関係を示す矢印を付し，《》内にカテゴリー，＜＞内にラベルと必要に応じて具体例も記した。

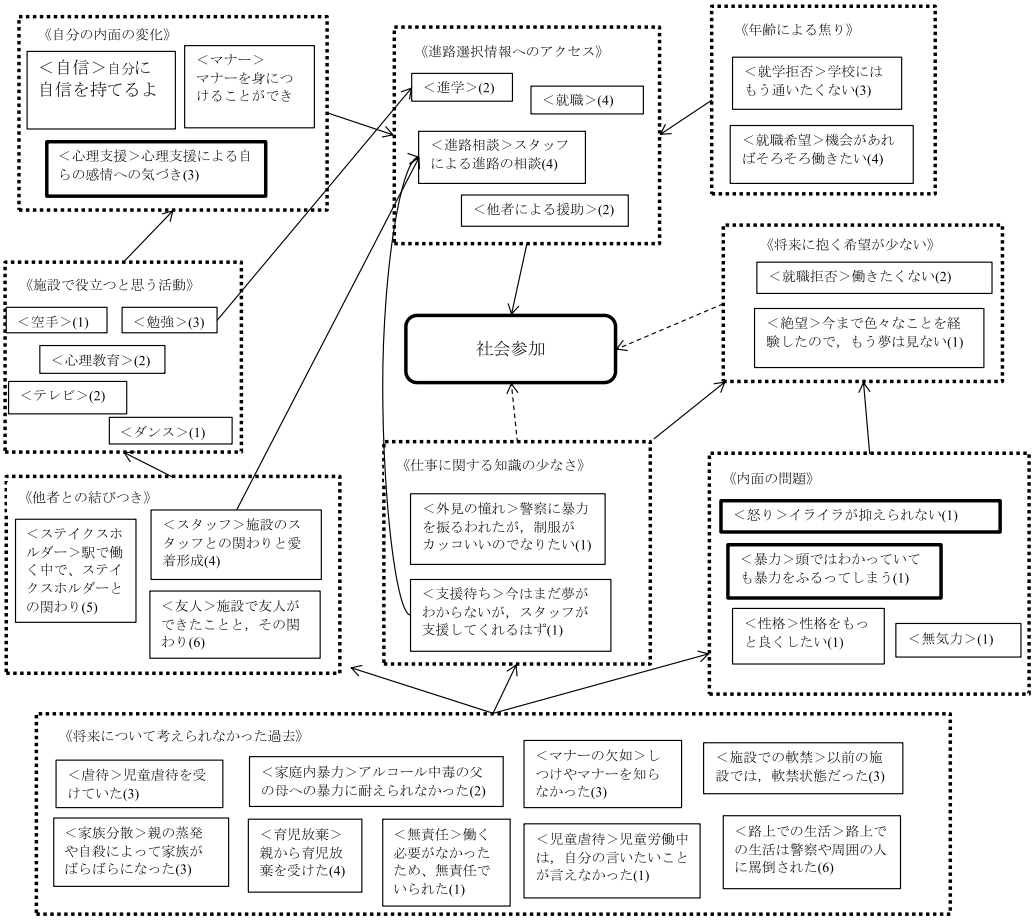

Figure3. 青年の社会参加についての全体的概念図

→　想定される促進関係
- - →　想定される阻害関係
（○）　カテゴリー中のラベルの数

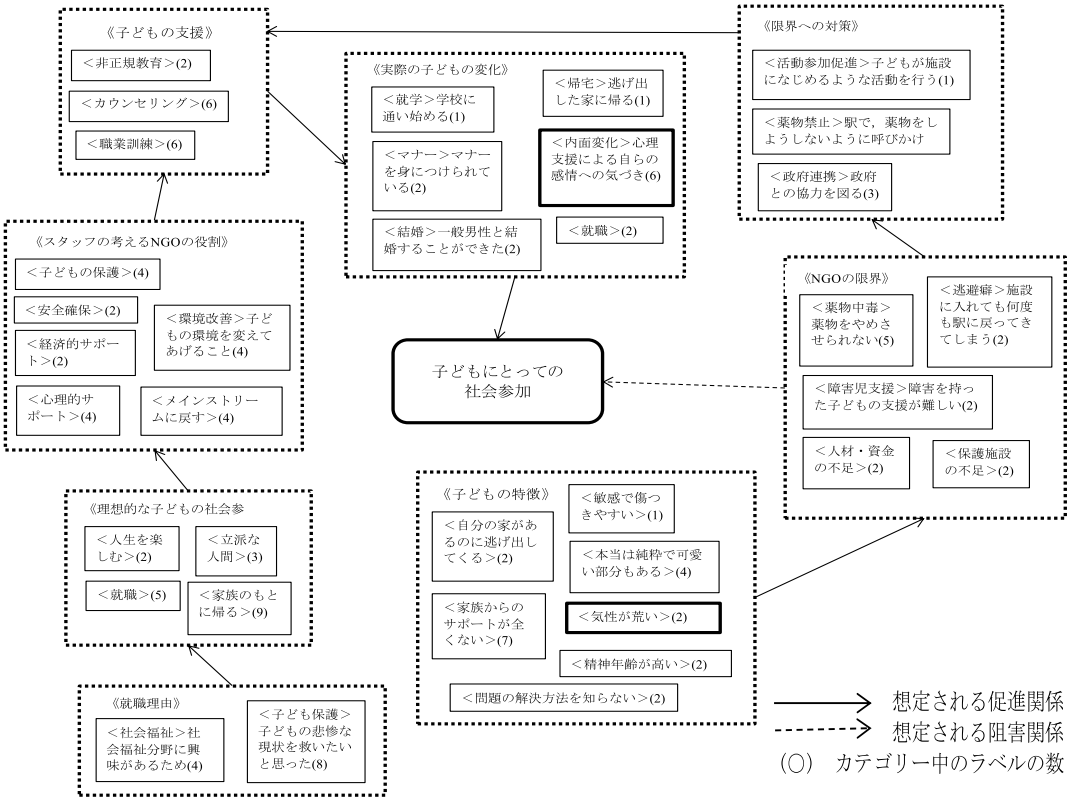

Figure4. スタッフの考える子どもの社会参加についての全体的概念図

考察

青年の語りから　Figure3 に示すように青年の社会参加についての関連要因として，33 のラベルと 9 のカテゴリーが生成された。そこで，まず関連要因ごとの考察を行い，その後関連要因の全体的な関係を考察する。ラベルとカテゴリーを表す場合それぞれ＜＞と《》の記号を用いることとし，語りの一部分を抜粋する場合は，『』の記号を用いる。また，施設との関わりについてのカテゴリーには，灰色の網掛けをしており，これについてはスタッフとの関係性ついて考察する際に用いる。

（1）関連要因ごとの考察　まず《将来について考えられなかった過去》は＜虐待＞や＜児童労働＞，＜路上での生活＞といった青年の過去が含まれている。このラベルの具体例としては，『昔（家庭や路上での生活）は，将来について考えることが出来なかった（C5）』という語りがあり，青年が将来について考える余裕がなかった，もしくはそうしたことが制約されていた状況下だった幼少期は，青年期の「社会参加」を阻害する大きな要素の一つと考えられる。次に《他者との結びつき》は，＜ステイクスホルダー＞や＜スタッフ＞，＜友人＞といった人間関係が含まれる。こうした他者との関係は NGO の施設に保護されるきっかけや，保護後，NGO の提供する活動に積極的に取り組めるかどうかにも大きな影響を及ぼしていると考えられる。具体的な語りとしては，『ここ（DIC）の女性スタッフが好きで，ここにいる（C10）』などが挙げられる。そして《施設で役立つと思う活動》の中には様々な活動が含まれるが，特に現在学校に通ったり，就職したりしている青年からは，

＜勉強＞の良さに関する語りが多く出た。《自分の内面の変化》は，＜自信＞や＜マナー＞というラベルが含まれ，全体的にポジティブな内面の変化である。《進路選択情報へのアクセス》は＜進学＞や＜就職＞など実際の進路選択に関するラベルから，＜進路相談＞という進路選択に際したスタッフによる相談という要素も含んでいる。

こうした青年の社会参加に重要となるカテゴリーもみられる一方で，《仕事に関する知識の少なさ》というカテゴリーは青年が過去の経験を話す際に暴力を振るわれるなどの理由から嫌悪の対象であった警察官に『制服がかっこいいから（C3）』という理由でなりたいという語りや，『将来の進路は，スタッフが手伝ってくれるはず（C12）』といったスタッフ任せの語りが含まれている。また，《内面の問題》は，《自分の内面の変化》とは反対に，＜怒り＞や＜無気力＞といったラベルが含まれる。この具体例としては，『時々，ここのスタッフと喧嘩してしまうことがつらいよ。彼らは優しくしてくれるのに，俺の機嫌が悪くて，イライラしてしまうんだ。（C4）』が挙げられ，頭ではわかっていても行動できない自分にいらだちを感じる青年の内面が垣間見える。更に，《将来に抱く希望が少ない》では，＜就職拒否＞や＜絶望＞という無気力からくると思われる青年たちの希望の低さが感じられる。最後に，《年齢による焦り》は＜就学拒否＞，＜就職希望＞といった表札からもわかるように，そろそろ進路を見据えねばならない焦りが感じられる。具体例としては，『もう勉強はいいよ。年も 17 だし，別に通いたくない。（C6）』が挙げられる。

（2）関連要因からみる全体的な関係　次にここまで述べたカテゴリー同士，および「社会参加」との関係性を考察していく。まず《将来について考えられなかった過去》は青年全員に共通する点として，空間配置の底辺に置き，そこから《他者との結びつき》，《仕事に関する知識が少ない》，《自分の内面に問題を抱えている》への三方向の矢印を示した。《他者との結びつき》は，灰色の網掛けで図示されるように，NGO の活動と関連が深い。例えば青年が施設に来るきっかけとして前述したように，駅のステイクスホルダーや，施設で出会うスタッフ，友人の存在は，その後の活動や社会参加を促す大きな要素であると考えられる。そうした他者との結びつきがあって初めて，施設の活動に参加し，そこで《施設で役立つと思う活動》に出会うことが出来るのである。そしてそうした活動の中には，描画療法やカウンセリングといった＜心理教育＞なども含まれており，青年は徐々に，《自分の内面の変化》に気付いていくのである。また内面の変化やスタッフとの愛着形成は，『今，ここのスタッフの人が車の修理屋さんと相談して，働けるかどうかを探してくれているんだ（C6）』といった語りにもみられるような，進路選択への意識を高めている。これらは《進路選択情報へのアクセス》に向かう要因として，大きな役割を担っているといえるだろう。他方で，青年自ら《年齢による焦り》を感じ，進路選択情報に積極的にアクセスしていく姿も，参与観察中の青年とスタッフのやり取りから感じられた。更に就職や就学の際には資料の作成や身元の証明が必要である。現在職に就いている青年の語りに『就職の際の手続き資料作成はスタッフが手伝ってくれました（C14）』とみられるように，識字率が低いこうした青年たちにとって，そうした手続き等にスタッフの支援があるか否かも社会参加するにあたって重要といえる。

つまり，施設に来た青年は他者との関係を構築，活動に参加したり，内面の変化に気付いたりするというプロセスを踏むことで，進路選択情報へのアクセスが出来るかどうかが変わってくるので

ある。そして情報にアクセスし，更に実際の手続きをスタッフと共に進めることが，青年の社会参加までのプロセスには不可欠といえるだろう。しかし，このような青年の進路選択に重要な役割を担うスタッフへの依存が高まりすぎることで,《仕事に関する知識の少なさ》という青年の現状を改善できないという関係もみてとれた。つまり，＜スタッフが支援してくれるはず＞という思いは，うまくいけば＜スタッフによる進路相談＞につながるが，情報へのアクセスに消極的なままでは，結局社会参加にはつながらないのである。また，こうした知識のなさは《将来について考えられなかった過去》から導かれると考える。具体的には，現在職に就いている青年の『実際の職に就いて初めて，世間にある職種の多さを知ったし，自分のやりたいことがわかった（C14)』という語りから，幼少期に親元を離れた彼らにとって，警察や物売りと言った身近な職業以外に視野が広まらないことが推測される。また，こうした青年の生い立ちは《内面の問題》にもつながってしまう。過去に虐待を受けた成人が自分の子どもにも同じようなことをしてしまう（井上・神谷，2008）といった負のスパイラルからも考えられるように，すぐかっとなって暴力を抑えられない青年がいることがわかった。そしてこれらが《将来に抱く希望の少なさ》という青年の状況を招いてしまうと考えられ，当然このような消極的な状態では社会参加は難しい。

ここまでの考察を踏まえて青年の「社会参加」を考えると，直接的に促進しているカテゴリーは《進路選択情報へのアクセス》のみである。つまり，この《進路選択情報へのアクセス》が青年の社会参加を考える上で重要であり，これを促進するために NGO が提供する《他者との結びつき》や《施設で役立つと思う活動》があるといえる。一方で,《仕事に関する知識の少なさ》や《将来に抱く希望が少ない》という 2 つは，直接的に青年の社会参加を阻害している。そして《仕事に関する知識の少なさ》や《将来に抱く希望が少ない》状態を促進する《内面の問題》に対して何らかの支援を行うことが，青年の社会参加の阻害要因の改善につながるといえるだろう。

スタッフとの関係性　こうした全体的な関係から見出された概念図における重要な促進要因として,「スタッフ」の存在があげられる。《他者との結びつき》や《進路選択情報へのアクセス》という促進要因においてはもちろん,《内面の問題》という阻害要因においては，スタッフの存在に感謝しながらも，自分の内面と葛藤する青年の語りが得られた。そこでスタッフの語りを基に「青年にとっての社会参加」の概念をあらかじめ設置した上で，青年の回答と同様に KJ 法によりこの概念とカテゴリーやラベルとの関係を空間配置した結果を Figure4 に示した。Figure4 に示すように，子どもにとっての社会参加についての関連要因として，37 のラベルと 8 のカテゴリーが生成された。青年の社会参加についての全体的概念図と同様に，関連要因ごとの考察と関連要因の全体的な関係から促進・阻害要因を考察する。

（1）関連要因ごとの考察と全体的な関係　まずスタッフは＜社会福祉＞や＜子ども保護＞を志望して現職についているという《就職理由》のカテゴリーは，CONC’RN の目標ともいえる《理想的な子どもの社会参加》というカテゴリーを目指すものとして強く結びついていると考えられる。この目標には，＜就職＞や＜立派な人間＞といったラベルが含まれるが，それぞれは切り離されていることは少なく，例えば,『自らの職を得て，家族を養い，自立してほしい（S3)』といった複数のラベルを含む回答が見られた。次にこうした理想は《スタッフの考える NGO の役割》として明

確化され，＜安全の確保＞や＜子どもの心理的サポート＞など，理想を達成するための役割で構成されている。そしてこうした役割を具体的な活動の形にしたのが《子どもの支援》というカテゴリーに含まれる＜非正規教育＞や＜カウンセリング＞，＜職業訓練＞といったラベルである。このような《子どもの支援》が《実際の子どもの変化》を導いている。

こうしたスタッフの支援対象である《子どもの特徴》に関しては，＜家族からのサポートが全くない＞や＜本当は純粋でかわいい部分もある＞といった青年の理解に関するラベルが含まれる一方で，＜気性が荒い＞，＜問題の解決方法を知らない＞といった青年の抱える問題を短所としてとらえるラベルもあった。具体的には『私たちは多くの困難に直面しています。その困難とはここの子どもたちが，攻撃的でときに暴力をふるってきたりすることです。また一般的な子どもたちと違って，そうした攻撃性や暴力を見せつけてきます（S3）』といった語りがみられた。これらの《子どもの特徴》が，＜薬物中毒＞や＜逃避癖＞といったラベルで生成されるカテゴリーである《NGO の限界》に一部影響していると考えられる。こうした限界に対しては《限界への対策》がとられ，子どもの＜活動参加促進＞といったスタッフの努力を示すラベルも含まれており，それらが《子どもの支援》を通して，間接的に子どもの社会参加を促す結果となっていた。

これらを踏えると，まずスタッフは常に「子どもにとっての社会参加」の促進を目指して活動しており，特に直接的な促進要因としては《実際の子どもの変化》が挙げられる。スタッフが青年の社会参加支援を志し，実際に《子どもの支援》を行うことで子どもの変化が促され，社会参加が促進されると考える。 一方で《子どもの特徴》が一部影響を及ぼす《NGO の限界》に関して，スタッフは青年の社会参加を意識的に阻害してはいないが，支援を行うスタッフ自身が限界を感じることが少なからず青年の社会参加の阻害要因として働いていると考えられる。具体的には,『何度サポートしても，子どもたちは自由やドラッグを求めて，駅や路上に戻ってしまうんだ。彼らの未来は彼らの心次第だよ。(S7)』や,『いくら教育が大切と思っていても，年齢があがると学校に行くよりも働いたほうが良いこともあります。そのときは職業訓練を受けさせますが，職業訓練施設がほとんどないので，うまくいきません（S8)』といった語りがみられた。つまり，スタッフは青年の社会参加を基本的には応援しているが，スタッフ自身の力でどうしようもないような＜薬物中毒＞や＜保護施設の不足＞に対しては，諦めともとれる語りがみられ，そうしたスタッフの態度が少なからず青年の社会参加の阻害につながっていると考えられる。しかし《限界への対策》をとることで，それが《子どもの支援》の促進要因として働くという関係性もあるといえるだろう。

（2）青年とスタッフの共通点・相違点　このように,「子どもにとっての社会参加」が出来るだけ促進されるようなアプローチをとる NGO スタッフであるが，その努力の結果として青年とのラベルで共通するものに，＜内面変化＞が挙げられる。また，青年にとって，社会参加に向かうプロセスの中には《施設で役立つと思う活動》や《他者との結びつき》といった NGO スタッフの介入によってのみ成り立つ部分があるといえる。しかし一方で，スタッフが《子どもの特徴》と捉える部分に関しては，青年が《内面の問題》と感じるラベルも含まれていた。ここから自らの抑えられない感情に悩む青年とその苦悩に気付けないスタッフとの間に認識のズレが生じていると考えられる。

他の NGO 施設の青年との比較　最後に，もう一つの調査地であった Loreto と CONC’RN の青年

を比較し考察を行う。Loreto は前述した通り Home で女子の保護を行っており，一度施設に入ると全員が学校に通い，そのほとんどが上限年齢の 18 歳になるまで保護される。更にキリスト系 NGO であり海外からの寄付金も多いことで，衛生環境や勉強道具など施設内の設備は充実していた。こうした環境要因に加え，145 人と収容人数が多いことから友人も出来やすく，心身共に健康だと考えられる回答が多く見受けられた。具体例としては，『ここ（Home）に来てから，様々な考えの人に出会い，刺激を受けていつも楽しいよ』，『学校やここで友達が出来，また年下の子をお世話することが出来て嬉しい』といった語りがみられた。こうした結果を CONC'RN に保護されている青年と比較した際，第一に生活環境が青年に及ぼす影響の大きさを考える必要があるといえるだろう。次に結びつきをもつ他者として，長期的で安定した友人の有無が青年の心理的安定に及ぼす影響も大きいと考えられる。また，NGO スタッフとして働く周囲の大人も女性がほとんどで，その多くが Loreto の運営する私立学校の出身もしくは，Loreto でシスターとして支援に関しての知識を身につけた者であった。このように青年期の過ごし方が類似していたり，Loreto の Home の仕組みを熟知していたりするため，支援相手である青年が施設で抱えるであろう問題を理解している発言も多くみられた。しかし青年期の女子の悩みとしては，複雑な友人関係やプライバシーの保護などを語る者も多くおり，青年の抱える問題とスタッフの問題の深刻さの認識に違いがみられた。これらを CONC'RN に滞在する青年とスタッフの関係と比較した際，Loreto の青年には路上での生活経験や児童労働経験が無いため，内面の問題は総じて施設での生活から生じるものであり，スタッフも問題そのものには気付いているが，その問題を解決できるまでには至っていないといえる。一方で CONC'RN の青年は施設での生活以前に，過去の経験に基づく内面の問題を抱えており，スタッフは現在の施設での生活だけではなく，青年の過去にも目を向ける必要があるといえるだろう。つまり，保護する青年のそれまでの経験を加味した上での理解と支援が重要ではないかと推測する。これは過去をあまり語りたがらない青年を支援する上で困難を伴うと予想される。しかし今回の調査で明らかになった心理支援の可能性から，元ストリートチルドレンや児童労働経験者という一定の枠にあてはめるのではなく，青年一人ひとりを個人として扱うことで，青年自らの語りと行動変容をもたらすことの出来るような支援が重要ではないかと考える。

本研究の目的は，幼少期に親元を離れた元ストリートチルドレンや児童労働経験者の青年が NGO の支援を受ける中で，社会参加に向けてどのような心理的プロセスを辿るかを検討することであった。まず幼少期に親元を離れ，路上での生活経験のある子どもたちの社会参加は容易ではないことが改めてわかった。NGO の支援によって社会参加が可能になる子どももいるが，そこには教育の機会のみならず，NGO スタッフとの結びつきを通してつくられた将来の選択肢へアクセスできる青年の心理変化が重要であることが明らかになった。次に支援の限界を感じる NGO への対応も重要な課題であると思われる。その対応の一助として今後，心理支援をはじめ青年の支援環境を整えることが重要だといえる。さらに青年と NGO スタッフの間に認識のズレがあることでどのような結果が導かれるのかを検討することで，青年の過去を加味した上での理解と支援の重要性を見出すことが出来るだろう。今回の調査は 1 ヵ月と期間が短く，子どもたちとのラポール形成が不完全であった。今後は更に長期の調査を通して，子ども達の社会参加へのプロセスを詳細に検討し，有効な NGO

支援の方法を探っていきたい。また，言語の問題，インタビュー内容など，調査技術に関しても様々に改良すべき点があるので，これらも今後の課題としたい。

引用文献

Company Registration India (2011). Social topic: Street children. Company Registration India <http://www.company-registration-india.com/> (January 11,2014)

深尾幸市 (2011). キンシャサにおけるストリートチルドレンの現状と NGO の取り組み ボランティア学研究，**11**， 69-84.

Government of India (2010). Indian population. Government of India <http://goidirectory.nic.in/index.php> (December 26, 2013)

針塚瑞樹 (2007). 子どもの路上生活経験と学校教育—インド，ニューデリーのストリートチルドレンを中心に— 飛梅論集：九州大学大学院教育学コース論文集，**7**， 1-17.

針塚瑞樹 (2011). インド都市社会におけるストリートチルドレンの「自己決定」に関する研究—— 子どもと NGO の関係性を中心に—— 九州大学大学院学位論文集，200-291.

Hindustan Times (2009). Gender valance of Kolkata. Hindustan Times <http://www.hindustantimes.com/> (January 9, 2014)

加藤隆勝・高木秀明 (1997). 青年心理学概論 誠信書房

McFadyen, L. (2004). *Voices from the street: An ethnography of India's street children.* Gurgaon: Hope India Publications.

中嶋裕子・中島友子 (2010). ストリートチルドレン・働く子どもを対象とするインドの NGO 活動の理念と実際 —NGO バタフライズの活動報告— 近畿医療福祉大学紀要，**11**(1)， 1-13.

永井撤 (2008). 思春期・青年期の臨床心理学 培風館

Nawani, D. (2002). Role and contribution of NGOs to Basic Education in India. In R. Govinda (Eds.), *India Education Report*. New Delhi: Oxford University Press.

応地利明 (1992). 世界の歴史と文化—インド— 新潮社

Panter-Brick, C. (2002). Sexual division of labor: Energetic and evolutionary scenarios. *American Journal of Human Biology,* **14**, 627–640.

Punalekar, S.P. (2004). On dialectics of voluntary organizations and social change. In S.N. Parwar, J.B., Amberkar, & D. Shikant (Eds.）*NGOs and development of the Indian scenario*. New Delhi: Rewat Publications，pp31-62.

Sondhi-Garg, P. (2004). *Street children: Lives of valor and vulnerability*. New Delhi : Reference Press，pp2-33.

The World Bank (2006). World development report 2007. The World Bank <http://www.worldbank.org/> (November 21, 2013)

米村明夫 (1992). 量的方法とリアリティ構成 ：メキシコ児童労働分析を例に 日本教育社会学会大会発表要旨集録，**44**， 276-277.